

氏名：森口 友香子

実施国：セネガル

調査研究

活動名称

農村社会における相互扶助ネットワークの変容
—セネガルにおけるマラブーとの農民の関係性から—

実施期間

2011 年 12 月 2 日—12 月 19 日

(1) 活動内容

アフリカの農村においては、農民は様々なネットワークを活用することで、リスクに対処してきた。その過程において、かつてセネガルでは、イスラム教団の導師マラブーによって農民は保護されており、農民はその代りとしてマラブーに労働を提供してきた。つまり、パトロン—クライアントの関係が結ばれていた。しかし現代の農民のネットワークとして指摘されているのが、農民同士の相互扶助ネットワークである。そこで、かつての農民のネットワークと現代の農民のネットワークとの違いを発見することを目的とし調査を行った。調査の内容は、セネガルの農村において聞き取りを行った。対象者は世帯とし、世帯における具体的なリスク対処方法を調査した。その結果現代において、農民はマラブーから保護を受けておらず、農民同士のネットワークによってリスクに対応している事実が確認され、現代農民のリスク対処方法の変化が明らかになった。



農民へのインタビュー風景



落花生油を絞る女性



村の女性と子ども達

(2) 活動を振り返ってうまくいった点、反省点

事前にどういった人を対象に調査を行うか構想を練っていた。その構想に沿うように農民への質問票を作成しておいた。聞き取り調査の焦点は、環境的または経済的なショックにどのように対処したか、であった。しかし1つ気がかりだったのは「ショック」をどのようにとらえるかという事であった。質問者である私と対象者である農民たちと「ショック」を共通の認識としてとらえることが出来るかどうか、調査の出来栄えを左右するといっても良いくらいであった。こういった事を念頭に置いていたため、調査を開始してから農民たちと共通認識を持つことに重点を置いた。その結果、今年度の降雨量が低いことが農民たちには厄介だという事が分かり、その事を「ショック」と見なし調査を進めることが出来た。

こういった農民の意識がどこに向いているかをとらえることが出来たのも、自身がウォロフ語を理解し、農民たちの話を直接聞く事が出来たからだを考える。特に定性的調査においては、被質問者にたくさん話をしてもらおう。その話のトーン、使用する単語などから伺えることは大きかった。

(3) 活動を通じて、国際貢献、国際交流ができたと思う点

宗教に関して、外国人にとってはなかなか理解が出来ないもの。しかしセネガルに限らず、外国では生活の中に宗教が入り込んでいることもあり、生活そのもの、もしくは生きる事そのものが宗教的観念と深いかわりを持つ地域が少なくない。そういう宗教が人々に与える影響を考えると、貧困削減などの課題に取り組む際には、宗教は切っても切り離せないだろう。本調査においては、宗教のネットワークが如何に農民のリスク対処に影響を与えているかを明らかにした。その意味で現代の農民を対象とした貧困削減政策に何らかの示唆を与えるものになったと思う。

また、個人的に実感することは、農民たちが信仰し生活の中でも重要な位置を占めている宗教の事を話題にする事が嬉しい様子が伝わってきた。人によってはこちらが遮るまで熱心に話してくれた。複雑で理解が難しい話も何度も根気よく教えてくれた。それだけ彼らにとっても大切なものであり、それを調査させてもらっていると思うと有難くなった。

(4) 今後の計画

本調査において、農村での調査・結果分析・考察を一貫して行い、論文にまとめるという作業を行ったことは、自身にとって大変有意義であった。フランス語やウォロフ語という外国語を使用しての調査の困難さを改めて実感し、その対策を練る中で学ぶことが多かった。今後は、貧困削減の課題に関して、農民は各世帯の単体ではなく、住民同士のネットワークを活用している事実を考慮に入れながら、プロジェクトの現場で活動していきたい。